【資料－7】　水環境はみんなで守る強いシステム　大阪経済大学　教授　稲葉紀久雄

日本下水道新聞（平成11年6月22日）

水環境をみんなで守る強いシステム

＝再論・松尾論文のアンチテーゼ＝

主張

大阪経済大学
教授
稲場　紀久雄

強い社会

松尾氏がこれほどディスポーザーにこだわっておられるのはなぜか。本紙三月二十九日号に発表された『稲場論文へのコメント』で見る限り、下水道という施設の見方に発しているように思える。即ち、「下水道という施設は、社会の最後の最後のエンドオブパイプ処理の役割を果たす物と考えている（略）。水の系における環境保全の最後の砦としてエンドオブパイプ処理の役割を果たす社会的施設はどうしても必要になると考えている。」

この考えは、ある種ヒロイックで美的である。しかし、私は、素直に「下水道は水循環の構成要素の一つ」と考えている。下水道は、水循環の要の役割を果たすという意味で重要ではあるが、『最後の最後』あるいは『最後の砦』ではない。下水道に全ての責任を押しつけてしまうのではなく、「最後」の責任を引き受ける主体は「みんな」である。社会を構成する人々みんなでその機能を支えるべきものである。こういう考えに立つ限り、松尾氏のようなディスポーザー論は出て来ない。もっと厳しい対応である。

これからの成熟社会では、『みんな』という参加意識が大切になる。イギリスのブレア首相は、その著『第三の道』で次のように言っている。

「われわれは繁栄する市民社会においてのみ個人として自己実現できるのであり、その社会を構成するのは確固たる家族と、賢明な政府によって支えられた市民機構に他ならない。大半の個人が成功するためには、社会が強くなくてはならない。社会が弱ければ、力と報酬は多数者でなく少数者へと流れて行く。」

ブレア首相の「強い社会」を下水道システムに当てはめればどうなるか。「みんな」で下水道機能を守るということであり、行政は自覚的で賢明な「みんな」の行為を支える役割に徹するのである。そこでは、『最後の砦』といった悲壮感は漂わない。水を回復させる場として信頼される下水道である。

流さないように回収に協力する。この行為は、市民にとって耐え難い苦役だろうか。下水道施設への負担を少なくし、自分達より下流域の人々に配慮し、水の大切さを思って自発的に行う人としての自然で暖かな行為である。

大切なのは、こうした行為を通して、市民の眼が常に水環境に注がれ、この市民の意識が水文化を支えることである。私達は、この意識を未来まで伝えたい。真の技術とは、こういう意識と表裏をなして、暖かい人間的な意識を育むものでなければならない。成熟社会では水文化が市民社会に根付き、技術システムがそれを支える。

水文化の基底

ディスポーザーは、こういう「みんな」の営為を破壊する。現在多くの市民は、誰にも命令されないのに排水の汚れを少なくするために水切の袋を流しの三角コーナーや排水口に付けて努力している。てんぷら油をディスポーザーの導入を受け入れるべく技術開発を進めるべきだ」（昨年十一月九日付別刷2面）という点にある。

この視点から今回のコメントでも「ディスポーザーを廃棄物問題の総合的な対策の中で考えたい」として、ディスポーザーの導入が地球温暖化防止やダイオキシン発生防止などに資するなど幾つかの利点を挙げた上で、「まさに現代だからこそ、ディスポーザーを見直す必要がある」と主張される。

私には松尾氏の利点と考えられている理由が強引付会に思えてならない。「なし崩し的状況はまずい」と言いつつ、「必要がある」と言われる。私達は、どう考えればよいのだろうか。それに、なにもかも一緒に捨ててしまうシステムが環境破壊を招いているのではないのか。

下水道は、先にも述べたように水循環の要の役割を果たす施設であり、水環境を守るという本来の目的を貫徹してこそ存立理由を示すことができるのである。下水道に携わる人々には、この厳然たる事実を忘れて欲しくない。

さらに付言すれば、下水道はこの厳然たる本来目的の貫徹のために技術革新を果たすべきである。ディスポーザー問題は、こういう視点からとらえて欲しい。私達が守るべきは、人間のみならず生態系を構成する全ての生物にとっての「生命の水」である。

生命の水

松尾氏は、「なし崩し的にディスポーザーが入って来るような状況はまずいだろう」と言われる。同感である。しかし、同氏の真意は、「下水道はディスポーザーし崩し的状況はまずい」と会に思えてならない。「なきなければならない。

人工構造物

この凝縮した一点から考えるとき、分別して「集める方法の現実性」に拘泥したり、「別の意味で技術至上主義に通じる」という論理は出て来ない。合理的な分別は行われるべきだし、分別によって処理が容易になるのは理の当然であろう。下水道という施設は、人工構造物だから、全ては私達の意図に沿って達成できなければならない。

こういう観点から注目すべき問題は、環境ホルモンである。松尾氏は、「女性のホルモンの排出までをも分離の対象にしなければならないというのは、なにか行き過ぎているように思える」と言われる。しかし、「人の尿中の女性ホルモンは、効率良く処理されず、魚類のホルモンを撹乱する原因になっている」という研究結果がある。

ピル解禁の問題もあり、イギリスでも懸命に研究が続けられていると聞く。環境ホルモンが下水処理場で効果的に削減できるような報道が見受けられるが、これは疑わしい。安易な社会的行政的配慮は禁物である。

最後に松尾論文に対して二回に亘って「アンチテーゼ」と題して考えを述べたのは、読者諸氏に一方に偏ることなく問題の全領域を考えていただきたいという願いからである。第一回目を書いた後、読者から何通かの感想をもらった。あたがたいことに、私の意図は、十分生かされたようだ。

松尾氏の「稲場論文へのコメント」に対して、これ以上細部に亘って討論する必要はないだろう。じっくりと読めば、分かるだろう。それより、読者には両論文の論点を整理し、それぞれを比較して考えて欲しい。この後は判断の全てを読者に委ね、今回で松尾論文に対する討論にピリオドを打つことにしたい。

ディスポーザー論議の掲載

昨年11月9日付別刷	松尾　友矩	
今年2月1日付4面	稲場紀久雄	
〃　2月8日付2面	亀田　泰武	
〃　3月29日付11面	松尾　友矩	
〃　5月17日付15面	水谷潤太郎	
〃　6月8日付2面	神林　章元	